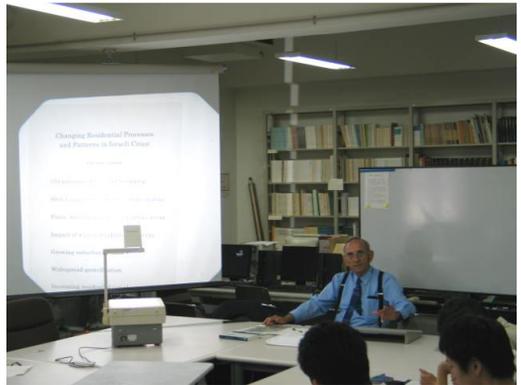


京都大学地理学談話会

会報

第16号



2005

[目 次]

寄稿

伝えたいこと……………	佐々木育子（昭和38年卒）	1
文章表現から画像表現へ～高校地理の現場から～……………	出口 学（昭和61年卒）	4
近況報告……………	奥野 守（平成13年修）	6

講演会の報告…………… 7

日本における近代・専門地理学形成期における巨人 中目覺……………	石田 寛…	8
近江・越前間における古代北陸道の変遷……………	門井 直哉…	9
映像にみる都市とジェンダー：“Sex and the City”の世界……………	村田 陽平…	11

研究室便り

〈外国人研究者～滞在された方と滞在予定の方～〉……………	13
〈地理学教室への寄贈図書～2004年度～〉……………	13
〈研究室の動静〉……………	15
〈3回生と新院生と三上さんの自己紹介〉	
〈昨年度の実習旅行〉	
〈学部卒業生・院生の進路〉	
〈院生の研究状況の報告〉	
〈学位の取得〉	
〈2005年度講義題目〉	

事務局から

〈地理学談話会2004年度会計報告〉……………	18
〈訃報〉……………	19
〈お知らせ〉……………	19
〈オープンキャンパス：2004年度の報告と2005年度のお知らせ〉……………	21
〈2005年度地理学談話会講演会・懇親会のお知らせ〉……………	21

寄稿

伝えたいこと

京都大学文学部以文会・事務局

佐々木 育子(昭和38年卒)

「桜の季節から青葉の季節に変わろうと
しています。元気で、仕事に子育てに
趣味に…励んでおられることと思います。

私はこの3月末、1963(昭和 38)年か
ら38年間勤務した追手門学院中高等学校
を退職しました。

高度成長期の真っ只中、戦後のベビー
ブームの世代が高校に入学した年—大阪
城の見える教室が私の追手門生活のスタ
ートでした。その後学校は茨木に移転、
そして今バブルがはじけた少子化の時代、
私は追手門での生活にピリオドをうちま
した。君たちと過ごした日々を懐かしく
思い出します。(以下略)」

2001年5月に卒業生たちに送った便り
である。

縁というものは不思議なものである。
故藤岡謙二郎先生の教え子とお話した
だけで何となく決まってしまった追手門
での生活。もし内定していたマスコミ
関係の道を進んでいたら…卒業前に
声のかかった府立大手前高校に行っ
ていたら…私

の人生は違うものになっていただろう。

私はこの38年間、自由な雰囲気の中
で良い同僚(教育現場では先輩・後輩も
また同僚)に恵まれ、いろいろな教え子
とその保護者に出会い、教える以上に
私自身が多くのことを学び育てられ
た。学校の外でも地理教育研究会の仲
間・研究で訪れた現地の人びと・三人
の子供を育てる中で(保育所運動・学
童保育等)知り合った人たちからど
れほど多くのことを教えられまた元
気を貰ったことか!感謝してもし
きれない。

ところで教育の現場にたつてはたと
困ったのが「地理」をちりぢりばら
でなく、如何に体系化して教えるか
ということであった。当初それらし
き本が見当たらず、同期の川瀬さん
、1年下の岩谷(現 山田)・上杉
さんと京都の喫茶店で「地理教育
を体系化するのは、大学で地理を
学んだ我々の使命」とか何とか
会合を持ったが、このようなこと
を考える先達がいはいはなく、東
京に生まれてきた「地理教育研究
会」に発展的解消とあいなった。
そうした中で私なりに考え、地
理教育の柱としたのは、次のよう
な点である。

- ① 地球上で営まれている我々の生活
(人文現象)は、自然(自然現象)の
制約を受けつつ自然のもたらす恵
みを利用してなされているもので
あり、このバランスを如何にうまく
とるか

は我々の叡智にかかっている。この自然との関わりを追求する点が、地理学が他の社会科学と異なる点であり、この観点から自然地理を扱う。

- ② 現在の我々の生活は、過去の人びとの創り上げたもの（歴史的条件）の上に成り立っている。
- ③ 地域は変化するものである。
20 世紀にあつては、地域を変える力は自然の力の他、(a)政治（行政の力）(b)資本の論理 (c)地域住民の力にある。
(メディア・IT によってよりグローバル化した今、情報力も入るだろう) 地域の主人公は「地域住民」であり、「地域住民」は主権者たる意識を持ち、その地域に責任をもつ。
- ⑥ 地域はまた相互に結びついて現在を形成している。他の地域と如何なる関係をもつか大きな課題である。
- ⑦ 「真実」はただひとつ。「事実」は見る視点により多数ある。われわれは「真実」を見抜く力を養わねばならない。教育とは人がよりよく生きるために、その手助けをするものである。
- ⑧ 「百聞一見に如かず」というが、地理の教師は多くを見て語ることが必要である。

地理の授業では、教室での授業に加

えて

- (a) 自分の住んでいる（含学校所在地）地域を歩き見聞し関心のあるテーマでレポートすること
- (b) 自分の関心のある国（または地域）について 1 年間新聞の切り抜きを続けレポートすること（新聞がすべて「真実」を伝えているとは限らないという留意点のもとに）

を課した。

生徒は地域でいろいろな発見をし、人と出会って結構楽しんでくれ、切り抜きでは「継続の力」をまざまざと見せ付けられ、レポートを通して、教室での一斉授業では見れない生徒の力にしばしば感動もした。

こうしたことができたのも当時の地理の同僚の協力あつてのことであつた。

ところで「地域は変わるものである」と書いたが、1960～70年代のエネルギー革命・経済の高度成長政策のもとでの地域の変化には目をみはるものがあつた。「公害」が日本列島を覆いスモッグのたちこめる空・どぶ川と化した河川…日本列島はこのまま破壊されつくすのではと心配したが、それを止めたのは各地でおきた住民運動であつた。私はそこに「人びとの力」を見た。阪神淡路大震災の時もそうだったが、いざとなったら動く「人の力」、私は今の難しい時代にもその力を信じ、そこに希望をもつものである。

昔読んだ小説に「時代はガラガラと音をたてて動いた」という文があったが、東西ドイツの壁が倒され（1985年東ベルリンから見た壁は不動の壁に見えた）、ソヴィエトが解体してからというもの、時代は音をたてて変わったといえよう。そして「戦争の20世紀」から新しい世紀に移ったその年におきた9.11事件から現在にいたるまで自然災害も含めて「時代」と「地域」は変動を続けている。そうした中で、「地理学」の果たす役割は何か!? 大きいものがあるろう。

私の昨今の憂いは多々あるが、重要な問題であるにも関わらずあまり重視されていない点を日本に限って一つ二つあげてみよう。

1. 農地が失われ疲弊し、政策もあいまって先進国一の食糧自給不可能国になっていること
2. 先端工業化の中で進んでいる土壤汚染等々

「水俣病」が問題になってきた頃、歴教協のメンバーと「水俣」を訪れたことがあった。水俣駅の真正面にチッソ工場は町を象徴するかのよう存在した。まさに企業城下町。被害者との集いに胎児性水俣病の女の児もきていた。私は正視するのをためらった。だがその時のお母さんの言葉は私の心に残った。「先生方! この児をしっかりと見てやって下さい! そうして二度とこうしたことが起こらない

ように教室でしっかり伝えて下さい」

地理の教師は、時間とお金のある限り多くを見て語る必要があるろう。1980年のはじめ高校で使用されたアメリカ合衆国の地図には鉄道網が最たる交通手段のように描かれていた。当時訪れたアメリカでは鉄道は既に斜陽化していた。すぐに地図帳にもフリーウェイが走るようになったが…昨年大学の教養時代の友人たちと訪れたサンクトペテルブルグには悩めるロシアを見たし、その前々年同じメンバーで行った長江下りでは開放経済のもと、大きく変わりつつある中国を目の当たりにした。

昨今の教育現場は「生き残るために」「早く成果を出すために」（教育の成果はそんなに早くでるものではないのだが）大変だと思うが、後輩がいたら頑張ってもらいたい。

縁あって、この春から桃山学院大学で教養としての地誌を教えることになった。介護保険年代に入る一歩手前だが、上に述べた延長線上で、若い人達に何か伝えられれば幸いである。

付記

これまた縁あって「以文会」の事務局を担当している。住所変更などのご連絡下さい。

(ibunkai@bun.kyoto-u.ac.jp)

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

文章表現から画像表現へ

～高校地理の現場から～

大阪府立北野高等学校

出口 学(昭和61年卒)

『絵地図の世界像』、『地図を作った人びと』からの引用文－4年前、3年生地理の授業に向けて作成したプリントの左半分は9ポイントの活字で埋まっています。古代バビロニアの粘土板地図の写真、京都大学文学部博物館の図録（昭和62年発行）からコピーしたポルトラノ、インターネットで検索したトスカネリの地図等々－今年、現2年生用プリントの左半分は画像で埋められています。

現任校で、私が地理の授業で最初に扱っているテーマは「世界像の変遷」です。現行の学習指導要領からは外れるのですが、地理学習の基本は地図。その地図という情報伝達媒体の根源的な意味を問うテーマであるという信念もあって、これを高校地理コースメニューの「前菜」と位置づけてきました。しかし、時代の変化でしょうか。「料理法」には若干の修正が必要になってきました。

私が現任校に赴任してきた2001年、前任の地理の先生が作成したプリントは詳細・精緻を極めていました。そのプリントに衝撃を受けました。「難関大学受験のためにはここまでやらなければいけない

のか。」という焦りを感じたのです。それからの日々は自分自身の持つ情報量を増やすこと、その情報をできる限り理解し解釈して生徒に伝えることにエネルギーを費やしてきたように思います。生徒たちは負担の大きい（と思われる）授業内容であるにもかかわらず、多大な努力を見せてくれました。「受験のため」という目的意識が忍耐力を支えていたのかもしれませんが。

そのやり方で授業を進めることに一種の「しんどさ」を感じたのが昨年度でした。2002年度から地歴・公民に関する本校の教育課程が大幅に変更されました。それまでは3年生の6単位で地理B（日本史Bとの選択）を履修していたのが、2年生で2単位・3年生で4単位という形になりました。その2年生の地理を昨年初めて担当したのです。「2年生だから」ということもあったかもしれませんが。3年生で地歴・公民の別科目を選択する予定の生徒がいれば、地理は「受験に関係ない科目」になります。しかし結果的には、今年ほとんどの生徒が引き続き地理を選択しました。つまり「受験のため」という目的意識は一定あったと思われる。

いわゆる新学習指導要領の影響はどうか。2003(平成15)年度高校入学の生徒たちは、一般的に、中学校での学習内容がかなり削減された学年という評価を受けています。本校教職員の間でも、

この学年が入学する前に「学力低下」を危惧する声が聞かれました。しかし彼らの地理の考查成績を見た限り、それまでの学年と比較しても問題を解く能力にさほど大きな低下は見られないというのが実感でした。

しばらく授業を続けていく中で気付いたのは、彼らは文章表現からイメージを描くことが苦手であるという特性でした。私自身が生徒であった頃、授業で配布されるプリントは手書きであり、ほとんど文字で埋め尽くされていました。地理のプリントには当然図版もありましたが、線画が主体であり、写真が豊富に入るといことは考えられなかった時代でした。しかし、それを材料に想像力を働かせ、頭の中でイメージを描いていた記憶があります。大学進学後、当時の文学部陳列館で初めて見たポルトラノの実物は、高校時代にやや不鮮明なプリントの図から思い描いたイメージとそう大きくは外れていなかったように思えます。色が茶色っぽかったことと予想以上に「しわくちや」であることを除けば…

テレビ、ビデオ、インターネット、携帯のサイトー今の生徒たちは、知識を書物よりもまず画像から吸収するのでしょうか。そういえば新学習指導要領になって教科書はフルカラー化されました。当該の学年には、その中でも写真が豊富に入った教科書を選びました。それまで副教材として利用していた写真資料集と同様

の使い方ができるという魂胆からです。軌道修正の方向が見えました。

現在の私の授業プリント、まず左側は「導入」です。なるべく生徒たちの興味・関心を引くように写真などの図版を多用します。印刷機も進歩して微妙なトーンもかなり許せる水準になりました。しかし、それだけでは不足です。右側は「ノート」と題して、重要事項を整理するとともに考察も加えます。トピックや断片的な知識だけでなく、そこから発展してその背景にある事象やそれらの知識を総合して得られる体系化された理論の一端に考え及ぶのでなければ高校地理の学習は不十分であると考えています。

限られた時間数の中で、「導入」を含めた授業を行うのは負担です。授業進度の減速を余儀なくされ、今年度3年生の地理を担当する先生には多くの宿題を託してしまいました。しかし、生徒たちへの定着効果は高いのではないかと自負しています。

高校における教科指導は、生徒たちに各自の希望する進路を実現できる力をつけさせるという一面があります。さらに地理という科目の、暗記だけではない面白さをわからせてやりたいという願望もあります。今年度私は2年生の担任で、自分の学年の地理と世界史を担当しています。去年や今年の教え子たちがどんな活躍を見せてくれるか、これからが楽しみです。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

近況報告

(株)パスコ 奥野 守(平成13年修)

京都を離れて5年目になります。時折、大阪出張の折に新幹線の車窓から京都の景色を眺めると、何か心がキュンとするような、そんな感覚をもち続けています。

私は、立命館大学で4年間、そして、京都大学の地理学教室で2年間を学びました。私は、百万遍のキャンパスから離れた四条室町で下宿をしていました。錦市場にも近いこの場所は、祇園祭の鉦町に取り囲まれ、ベランダの窓を開けると、祇園囃子の笛の音色が聞こえ、京都らしい風情を満喫できました。このような贅沢な時間は、しかし、私があまり教室に足を運ぶことがなかったために得られたものかも知れません(苦笑)。ですので、今回、談話会報への執筆依頼を伺ったときは、少し驚きといいますか、正直なところ、研究成果や学生生活に胸を張れる学生では甚だなかったものですから、「私でいいの？」みたいな思いで逡巡しました。そこで、私のひとまずの近況報告というかたちで、執筆させていただきたいと思います。

私は現在、株式会社パスコ(<http://www.pasco.co.jp/>)に勤務してい

ます。もともとパスコは、航空測量から出発し、主に官庁向けの測量業務、道路台帳、固定資産管理、GISを基盤としたシステム構築や都市計画などのコンサルティングをおこなってきました。しかし昨今の公共事業の縮減を受けて事業環境が低迷したこともあり、民間企業に対するビジネスの展開に注力し、私も入社以来4年間、民間企業向けのシステム構築を主業務として今日に至っています。

たとえば、パスコで提供する「いくとこガイド」(<http://www.ikutoko.com/>)をご覧ください。京都市左京区吉田本町で住所検索をすると、周辺地図にあわせて、航空写真、飲食店や公共施設、宿泊施設など様々な地域情報が提供されます。パスコでは、このような情報技術を基盤に、多様なニーズにあわせたソリューションを手掛けています。主力のエリアマーケティングツールは、すでに500社近い企業で利用されています。新規出店の立地選定や店舗の統廃合、SASなどマイニングツールと連携した売上分析は、大変好評をいただいております。少し、宣伝が過ぎました(苦笑)。

私の主業務は、営業部門やコールセンターなど、企業とお客さまとの接点にあたるフロントエンドと呼ばれる部門で利用される業務系アプリケーションをGISと連動させたソリューションの提供です。営業部門に対しては、休眠顧客の発

掘や見込み顧客の発掘など、現場レベルでこれまで感じてきた経験知を顕在化させ、企業内システムとして定着させます。業務ヒアリングをおこない要件を取り纏め、システム構築に必要な設計をおこないます。基幹系と呼ばれる受発注のシステムをはじめ、いくつかの業務系アプリケーションが併用されているケースが多く、そのため、システム間を連携させて二重入力などの業務時間を短縮する、あるいは、身近な携帯端末など様々なデバイスから簡易に必要な情報を登録し、地図上へ集めた情報を展開させるなど、様々な工夫が必要となります。システム構築がはじまれば、納期を守るために日々工程管理をし、品質をチェックしながら取り掛かります。論文を取り纏めるプロセスと置き換えて想像いただければ理解しやすいかも知れません。お客さまは勿論ですが、プロジェクトのメンバーとは様々な議論をおこないます。しかし、多くのメンバーが複数の業務を抱えながら仕事を進めることもあり、全てのプロジェクトで万全を尽くしきれず、残念な思いや悔しい失敗をすることもあります。いまになって振り返れば、自分の研究に没頭できる学生の時間が羨ましく感じる場合があります。また、地理学教室では、先生方や教室のメンバーが真剣に議論を交わす場がありました。それは、本当に貴重なものだ、これも、いまさらながら感じるどころです。

様々なお客さまと接するなかで感じることも多くあります。ひとつは、地理情報を正確に理解し、加工し、判断するノウハウをもった人材がまだまだ不足している、ということです。多くの企業で求めるニーズは、業務アプリケーションの構築を通して得られる情報の判断です。この判断に力添えできる人材が、地理学を学ぶ学生から多く輩出されることを願っています。実は、このノウハウは、地理学を学ぶ皆さんが最も得意とする領域ではないでしょうか？ その意味では、就職を検討される学生の皆さんには、ぜひ、堂々と、いま地理学教室で学んでいることの多くを率直にアピールしていただきたいと思います。皆さんの希望が実現されることを願っています。

最後になりますが、皆様のご多幸とご健勝、地理学教室の発展を心より祈念いたします。

→↑←↓→↑←↓→↑←↓→↑←↓→↑
☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

～講演会の報告～

2004年11月6日、時計台記念館国際交流ホールにおいて、談話会秋季講演会として、福山大学教授石田 寛先生、福井大学教育地域科学部助教授門井直哉先生、京都大学大学院文学研究科博士課程村田陽平氏に講演していただきました。

日本における 近代・専門地理学形成期における

巨人 中目覚

石田 寛（福山大学教授）
（昭和17年卒）

中目覚（なかのめあきら、1874～1959）は代々詞藻豊かな文人を輩出した仙台藩士の子に生れ、幼児漢籍素読で神童と謳われ、中学時代フランス人宣教師と日・佛語相互教え合いでフランス語をマスターし、仙台第二高等学校入試ではフランス語で答案を書いたという秀才。東京帝国大学で独乙文学を専攻し、時計組で卒業。同時に金沢第四高等学校ドイツ語教授に就任した語学の天才であった。つづいて新設の広島高等師範教授（地理学）に抜擢され、中目覚が幼児からいだけて来たロビンソークルーソの世界旅行を実現の第一歩として、文部省の奥国満三ヶ年留学生となり、つづいて新設の広島高師教授（地理）に任ぜられる。

ウィーン大学でペンク（A. Penck 1876～1940）教授、ブリュックネル（E. Brückner 1862～1927）の下で地理学を3年間学ぶ。滞欧中地理学者のみならず他分野の学者とも交流し知見を広め友を得る。アメリカのハンチントン教授（Ellsworth Huntington 1876～1940）とは特に親交を結ぶようになる。

中目覚は20世紀初頭、日本近代・専門

地理学形成・発展期における多才な傑出した地理学者の一人であった。

文部省は地理研究のための留学生（満三ヶ年）を20世紀の初頭から10年代の初にかけて派遣している。その一人目は東京高等師範学校地理学教授予定者、二人目は広島高等師範学校地理学教授任命3ヶ月間授業をただけでヨーロッパに派遣されている。ヨーロッパ留学の成果が著作物として日本で結実するのが1910年代である。その頃、京都帝国大学文科大学（1907）及び東京帝国大学理科大学に地理学講座（1911）が創設される。このような点から観て、1910年代は日本地理史上、大きな転換期である。

この時期の立役者として石橋五郎・山崎直方・小川琢治の三人が採上げられているがいくつかの指標から観て、筆者がこゝで論じようとしている中目覚（1875～1959）は、前記3地理学者同様、日本地理学史上重要人物の一人である。帝国大学教授にこそ任命されては居ないが、近代・高等教育（higher education）レベルの地理学研究を推進し研究者を養成していくに相応しい学習・研究をしている国際的地理学者である。すなわち広島高師で高等教育レベルの地理学カリキュラム作成・教育の実績を持つだけでなく、京都帝国大学で、3年引続き破格の待遇で人文地理学の講義を担当している。

中目覚はあまりにも多才、スケールが大きく、教育行政の面で縦横の活躍をし

ながら、地理学の調査研究を続け著作を続け、地理学への思い入れは膨らみ、地理学矮小化を憂慮していた。学際研究、地域研究、通文化研究が唱道される今日、中目覚の諸研究は改めて見直されるだけの価値がある。

中目覚は教育行政官、小樽市手宮洞窟壁面の古代文字解読の言語学者とし広く知られてはいたが、地理学者としては大方忘れられていた。昭和十一年広島高師へ入学した筆者は、高師初代教授中目覚のとりあげた洞窟壁面印刻は偽作であるとの説を耳にして淋しい思いをしたことがあった。時の流れは速く、私が広島大学を退官して十数年後私に「あなたの温故知新」を語ってくれと需められたが、「それは早過ぎる、広大地理の基を築いた中目覚先生のことを話しましょう」と地理科学学会で中目覚先生について話をしたのが、私の中目覚研究の発端である。そしていくつかの研究物を公表した。各方面から暖かい協力をいただいた。地理学界からは、全国各大学地理教室史連載の一環として広島大学地理教室史を担当された設楽寛からは、仙台帰郷最晩年の中目覚の調査に積極的協力を得た。

岡田俊裕は筆者の一連の研究を採り挙げ、日本近代地理学史のうえに位置づけしており、さすがと頼もしく思う。筆者はさらに資料博搜につとめて表示しその位置付けをさらに確固たるものにしたのである。

中目覚について筆者は、地理学を中心にすえ、概観 2 篇、と時期別詳論 3 篇を公刊している。しかし広島高師教授期はヨーロッパ留学を含むので、本論では採り上げられなかった点に言及し、本論では大阪外国語学校長時代をかなり詳論することにならう。その焦点は近代、専門、地理の形成・発展であり、研究法としては、伝記・著作物研究 (biobibliographical approach) を採用する。

○◎◎◎◎◎

近江・越前間における 古代北陸道の変遷

門井 直哉 (福井大学教育地域科学部)

(平成 7 年卒)

近江・越前間の古代北陸道のルートをめぐるは、①西近江路から天長 9 年 (832) 以降、白谷越え (雨谷越え) に遷ったとする説 (木下良氏)、②若狭経由のルートから、延暦 14 年 (795) に白谷越えに、そして天長 9 年に西近江路へと遷ったとする説 (足利健亮氏)、③延暦 14 年の近江・若狭間の駅路廃止までは、若狭経由ルートが白谷越えとともに北陸道駅路として機能し、天長 9 年以降、白谷越えから天長 9 年に西近江路へと遷ったとする説 (山尾幸久氏) などがある。本発表では、これら既往の学説を踏まえながら、当該区間の北陸道の変遷に関する私見を提示する。

まずは既往研究において、西近江路か白谷越えかのいずれかに比定される天長9年～延喜式段階の北陸道について検討してみたい。天長9年のルート改変は「荒道山道」の開削によって生じたものであるが、これはその2年前に行われた敦賀・今庄間における木ノ芽峠越えの開削と一連の事業であったと考えられる。敦賀・今庄間では、天長7年以降、迂回路となる山中峠越えから、短絡路の木ノ芽峠越えに北陸道が遷った。したがって、天長9年の「荒道山道」とは、敦賀・湖北間の短絡路となりうる白谷越えであった可能性が高い。

天長9年～延喜式段階の北陸道が白谷越えであったとなると、それ以前の北陸道ルートは、(ア) 若狭経由ルートから延暦14年に西近江路へ遷ったか、(イ) 一貫して西近江路が北陸道であった、かのいずれかということになる。これを解明するには、北陸道上に延暦8年(789)まで存続していた愛発関の位置を知ることが大きな鍵となる。

なお、愛発関の位置については、近年、若狭・越前国境の関峠に比定する向きがあり、若狭経由ルート説の一つの根拠となっている。しかし関峠に愛発関を比定する場合、天平宝字8年(764)9月の恵美押勝の乱において、湖西を北上して越前国府を目指した押勝は、追手の接近を知らながら、悠長にも若狭まわりで越前入りを果たそうとしたこととなり、いか

にも不可解となる。また諸史料に登場する「愛発」関連地名は、西近江路沿いに密接な関係をもっている。これらの点からすれば、愛発関は関峠よりも西近江路沿いに存在した可能性が高いであろう。西近江路沿いでは、塩津からの深坂越えをも扼し、関を設置しうる十分な平地を有する厩田が、従来、有力な候補地とされているが、近年までの発掘調査では遺構・遺物は発見されていない。しかしいづれにせよ、愛発関は西近江路上に求めるべきであり、天長9年以前の北陸道ルートは(イ)とみるのが妥当である。

以上の検討をまとめると、律令時代の北陸道は西近江路から天長9年に白谷越えへと遷ったということになる。近江・越前間を結ぶ若狭経由ルートは支路として位置づけられ、延暦14年に近江・若狭間の駅路が廃されたという経緯が想定される。

もっとも『古事記』仲哀天皇段にみえる太子時代の応神の角鹿への行啓ルートや、応神天皇段にみえる「角鹿の蟹」の歌が示すように、若狭経由ルートは、律令時代よりも更に古い時代の「古北陸道」というべき道筋であった。そして大化2年(646)の改新詔に謳われた駅制の創設が端緒となり、7世紀の半ばに「古北陸道」から近江・越前を直結する西近江路の北陸道へと、この地域の交通路体系に変化が生じたのであろう。大化3、4年には日本海側辺境地域に淳足柵・磐舟柵

が設置され、また斉明朝には数次の蝦夷・肅慎討伐が行われるなど、当時の政権の関心は東北方面へと向けられていた。西近江路の北陸道は、大和から東北方面へと人・物資・情報をより迅速に伝達するという、この時期の政治的軍事的要請から創設されたものと考えられる。

なお「北陸」「北陸道」の語は、崇神紀や崇峻紀において「クヌ(ル)ガノミチ」と訓じられているように、古くから「陸の道」と認識されていた。このことは「古北陸道」が、律令期の北陸道ほどの延長をもって朝廷に把握されていなかったこと示している。そして、律令期には木ノ芽山地を駅路で越えず、敦賀から船で往来するケースもあることからすれば、北陸道の整備以前、一続きの陸路としての「古北陸道」の終着地は敦賀であった可能性が考えられる。畿内方面から敦賀までの「古北陸道」の臨海区間は、後の若狭国遠敷・三方郡、越前国敦賀郡のわずかに3郡にすぎず、まさに「陸の道」と称するにふさわしい状況といえる。おそらく令制国成立以前の「ワカサ」と「コシ」の境界は木ノ芽山地にあり、地勢的にも文化的にも若狭国との同質性の高い敦賀は、元来、御食国「ワカサ」としての性格を有していたものと思われる。それが7世紀半ばの交通路体系の変化により、敦賀は「コシ」への入口、すなわち「コシノミチノクチ(越の道の口)」としての性格を強め、「コシ」の境界は木ノ芽

山地から野坂(愛発)山地にまで南下し、西は関峠が「コシ」と「ワカサ」の境界となったのであろう。敦賀が地勢的・文化的に近い若狭国ではなく、越前国敦賀郡として編成されたのは、このような空間認識に起因するものであり、交通路体系のあり方が国郡の領域編成に大きく関わっていたものと推察する。

○◎◎○◎○○

映像にみる都市とジェンダー

“Sex and the City”の世界

村田 陽平(京都大学文学研究科・院生)
(平成12年卒)

最近の「ジェンダー地理学」分野の一つの傾向に「映像資料」などのメディアへの注目が挙げられる(Rose 2002)。例えば、「セクシュアリティと都市」を特集した英文誌“Urban Studies”のVol. 41-9(2004)では、地理学者の論文を中心に12本の論文が掲載されたが(Bell and Binnie 2004; Hubbard 2004 など)、メディア関連のものとして、イギリスのテレビドラマ“Queer as Folk”(ロンドンのゲイの若者をテーマにした作品)の事例研究(Skeggs et al 2004)が発表された。「映画」「広告」「写真」等にみられる映像は、日常的な空間や場所におけるジェンダー関係を反映することが多く、とりわけ普及性を有する「テレビドラマ」というメ

ディア表象の意味を探ることは、現実的なジェンダーの様相を把握する上でも意義深いと考えられるようになってきているのである。

本発表では、このような観点から、英語圏のテレビドラマ“Sex and the City”における都市とジェンダーの意味を、Sohn et al(2004) を主な資料として検討したい。“Sex and the City”とは、Bushnell (1997)のエッセイを原作とした、全米最大のケーブル TV 局“HBO”製作のテレビドラマである。1998年6月から英語圏を中心に放送が開始され（日本では2000年12月から）、その後、アメリカの2大TV賞（Emmy賞・Golden Globe賞）を何度も受賞したように、高い評価を受けている。

物語は、主要な登場人物である30代のシングル女性4人の経験する日常生活（恋愛・仕事・家族など）を、「ニューヨーク・マンハッタン」という都市と対比させながら進行する。セックスというタイトルなどから「男女関係」が中心的なテーマであるかのように捉えられるかもしれないが、この物語の核心は、都市に生きる女性たちの生き方やその友情関係、新しい家族像の模索にある。第2波フェミニズム以降、女性は、経済的自立をはじめとして、人生の多様な選択肢を得られるようになった一方で、それに伴うさまざまな問題（例えば「キャリアと恋愛との間での迷い」）も抱えるようになった。

このドラマは、そのような「新しい」テーマを積極的に扱うことで、現代女性をはじめとする先進的なジェンダー意識をもつ人々の大きな共感を集めたのだといえる。

そして、このドラマの大きな特徴として挙げられるのが、そのような女性の姿が、ニューヨークという都市の視点とともに描かれている点である。主役の俳優がニューヨークのイメージに責任をもちたいと述べたように、またプロデューサーたちがニューヨーク市役所の協力のもとニューヨークの5つの自治区の姿を万遍なく撮影することを目指したように、ニューヨークという都市は「5人目の主人公」として描かれているのである。このように新しい女性の姿を都市という要素に重ねて描くことは、このドラマが一部の例外的な物語ではなく、一般的な側面を有するものであることを意味づける効果があるといえる。都市の特質の一つに、多様な人間の生活の場を受容することがあげられるが、この意味で、このドラマの都市の表象の強調は、新しい女性像が都市という全体性の中で受容されていることを示唆するのである。そして、このようなドラマを制作する英語圏メディアのジェンダー意識の先進的側面があらためて確認される。

ただし、このドラマでも「物語」として描かれなかった点がある。それは、プロデューサーが「4人の30代女性ではな

く、4人の30代男性を主人公にしたら憂鬱なドラマになったであろう」と述べるように、男性についてのジェンダーに関する先進的な視点である。女性の表象に関して進歩的な映像においても、なぜ男性の表象が保守的であるのかは今後も詳細に検討していく必要があるだろう。

[文献]

・ Bell, D and Binnie, J. 2004. Authenticating queer space: citizenship, urbanism and governance. *Urban Studies* 41- 9:1807-1820.

・ Bushnell, C. 1997. "Sex and the City", Warner Books Inc. 古屋美登里訳. 『セックスとニューヨーク』ハヤカワ文庫NF.

・ Hubbard, P. 2004. Cleansing the metropolis: sex work and the politics of zero tolerance. *Urban Studies* 41- 9: 1687-1702.

・ Rose, G. 2002. "Visual methodologies", London: Sage.

・ Skeggs, B., Moran, L., Tyrer, P. and Binnie, J. 2004. "Queer as Folk": producing the real of urban space, *Urban Studies* 41- 9 :1839-1856.

・ Sohn, A., Wildman, S. and Parker, S. 2004. "Sex and the city — Kiss and tell". Rev&Updtd, Pocket Books.

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

<外国人研究者

～滞在された方と滞在予定の方～>

2004年4月から6月まで、アミラム・ゴーネン先生（エルサレム・ヘブライ大

学地理学科，イスラエル）が外国人共同研究者として，日本の墓制について調査されたほか，5月12日には「Urban Residential Geography of Israeli Cities」と題して，ご講演いただきました。

本年度は，文学研究科客員教授として，5月10日から8月31日まで，カオ・リー・リャオ（Kao Lee Liaw）先生が地理学教室に滞在されます。リャオ先生は，カナダのオンタリオ州ハミルトン市にあるマクマスター大学の地理・地質学科教授をされてます。滞在中，「人口地理をめぐるカナダ・日本の比較研究」という題目の研究に従事されるほか，ご講演も予定されています。

<地理学教室への寄贈図書

～2004年度～>

個々の寄贈者のお名前は掲載しておりませんが，昨年度，地理学教室にご寄贈いただいた図書の一覧です（雑誌・定期刊行物等は除く）。これらの図書は，文学部閲覧室または地理学共同研究室に配置し，学生ならびに教室スタッフの研究・教育に活用させていただいております。厚く御礼申し上げます。

過去にいただいた図書も含めて，これらの寄贈図書は，談話会員の皆様にもご利用いただけるようにしておりますので，

どうぞご活用ください。

石川友紀(2004)『旧南洋群島における沖縄県出身移民に関する歴史地理学的研究』(科学研究費報告書)

内田忠賢(2003)『都市民俗生活誌データベース作成のための基礎研究』

大嶽幸彦(2004)『地理学から見た「農務省蔵版欧米巡回取調書」』

大嶽幸彦(2003)『人文地理発想法入門—一頸城野からの発信』大明堂

岡橋秀典『経済自由化後のインドにおける都市・産業開発の進展と地域的波及構造』

お茶の水女子大学大学院人間文化研究科(2004)『国際日本学の可能性』(第5回国際日本学シンポジウム報告書)お茶の水女子大学

京都大学大学院文学研究科西洋史研究室(編)(2004)『近世中・東欧における地域とアイデンティティ』京都大学大学院文学研究科西洋史研究室

小林浩二・ヨゼフ・ムラーデク(2004)『スロバキアと日本における出生率低下・人口移動, 高齢化の相互関連についての地理学的研究』日本学術振興会・日欧共同研究報告

小林浩二・ヨゼフ・ムラーデク(2004)『家族・暮らし・地域の変化—日本とスロバキア—』(国際研究集会)

日下雅義(2004)『地形環境と歴史景観』古今書院

東北大学理学部(2003)『郡山市中心市街

地の現象と活性化の取組み』

関西大学(2005)『国際シンポジウム 風土と技術の近代』(報告書) 関西大学

関西大学地理学教室(2004)『京都府久美浜町の地理』(実習調査報告書28)

菊池俊夫(2004)『大都市圏における農地利用の多機能化とその調整メカニズムに関する地理学的研究』(科学研究費報告書)

慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室編(2004)『空をこえた対話: 三田の考古学』六一書房

地理情報システム学会用語・教育分科会編(2002)『地理情報科学用語集第二版』立正大学地球環境化学部地理学科

東洋文庫東北アジア研究班(朝鮮)編纂(2004)『日本所在朝鮮戸籍関係資料解題』東洋文庫

松橋公治(2004)『産業集積地域における産業支援諸制度の形成と地域的役割に関する地域間比較研究』(科学研究費報告書)

山本健児(2004)『産業集積地域におけるイノベーション形成に関する比較実証研究: 「イノベティヴ・ローカル・ミリュー」と「暗黙知」概念の有効性の再検討』(科学研究費報告書)

和歌山大学教育学部(2004)『和歌山県紀中・紀南地域調査報告』(No.32)

和歌山大学教育学部(2004)『和歌山県新宮市調査報告』(No.33)

Gonen, A. (1995): *Between city and suburb:*

urban residential patterns and processes in Israel, Avebury.

Christian Vandermotten, et al. (2004):
Migrations in Europe: the four last decades, (IGU-Home of geography publication series), Società Geografica Italiana.

Takamura, H. (2004): *Environment and human activities in the southern part of the Taklimakan desert*, Institute of Environmental Sciences, Risho University.

<研究室の動静>

教室の事務は、引き続き真木智子さんにお願い致しております。なお、真木さんの産休・育休期間は、三上純子さんに事務をお願いすることになりました。

本年度は、研修員1名、大学院博士後期課程5名、修士課程10名、学部4回生14名、3回生7名となっております。

<3回生と新院生と三上さんの自己紹介>

本年度は7名の3回生と3名の新院生(修士課程)、それに、三上さん(事務)を迎えました。簡単に自己紹介させていただきます。

(3回生)

香川絵里

初めまして、3回生の香川です。私は都

市開発に興味があり、都市地理学を学ぼうと地理学を専攻しました。特に、都市開発における観光産業の影響について研究したいと考えています。また、サークルでは「京都学生ガイド協会」に属し、京都市、奈良市での観光ガイドを行っています。また、夢はケニアに行ってマサイ族のダンスを生で見ることです。では、これからどうぞよろしく願いいたします。

桑名光紀

3回生の桑名光紀です。出身は大阪で、最近下宿を始めました。チャリ旅や地図を見るのが好きで、学ぶ分野としては、交通や立地を主にやりたいです。ずっと地理学をやりたいだったので楽しみですが、研究室という雰囲気に緊張もしています。よろしく願いします。

煙山哲史

初めまして。今年新しく地理学専修になった煙山哲史です。これで「けむりやまさとし」と読みます。変わった名前ですが、よろしく願いします。希望としては都市、特に都心部、商業中心地区などについて学びたいと思っています。

平川生在

高校のときに地理の授業が楽しかったので、大学でも地理を専修することにしました。世界の少数民族や文化に興味があ

ります。地理学教室では実習など自分で考えて作業することが多いと聞いているのでがんばりたいと思います。

本多真太郎

3回生の本多真太郎と申します。福井県出身です。趣味は旅行のガイドブックやパンフレットを読むことと、弓道です。高校の時から地理学教室にあこがれていました。都市の変化の課程や居住地域等に関心があります。宜しくお願ひします。

南都奈緒子

名字は「みなみのみやこ」と書いて「なんと」ですが、出身は秋田県です。南でもないし都でもありません。山に囲まれていると落ち着くので、大文字山の近くに下宿しています。ゼミは金田先生のところ。よろしく御願ひします。

山下益也

皆さんこんにちは。新3回生の山下益也と申します。出身は静岡県の磐田市です。サッカーの盛んな地域なのですが、私はずっと野球を続けていて、大学でも野球部に所属しています。母校の校訓である「文武両道」を目指しています。どうぞ宜しくお願ひします。

(修士課程 1 回生)

牛島由紀子

お茶の水女子大学の出身です。「エスニシ

ティ」「アイデンティティ」「日常生活」「ライフストーリー」「景観」・・・などが注目のキーワードです。人気の少ない美術・博物館が好きで、只今漆器の見られるよい所を探しています。よろしくお願ひいたします。

(事務) 三上純子

4月から引継いで研究室に来ています。3月までは、中文研究室の事務を4年ほどしていました。慣れないうちはご迷惑やご不便をお掛けすることと思ひますがどうぞよろしくお願ひいたします。出身は伊勢市で、外宮の近くで育ちましたが、京都での生活も長くなり少し寂しいような、京都人に近づいて嬉しいような？複雑な心境です。

<昨年度の実習旅行>

2004年度は、10月17～20日まで、山口県萩市において、2回生・3回生の計8名が調査を行い、報告書を作成しました。

<学部卒業生・院生の進路>

*学部卒業生

安形俊太郎 株式会社デンソー

網島 聖 京都大学文学部

科目等履修生

井上 安里 伊勢市役所

尾崎 真弘
 林 久美子 富山県立高岡商業高校
 星田 侑久 京都大学大学院文学研究科
 宮澤 博久 京都大学大学院文学研究科
 村岡 広紀 株式会社日立製作所
 情報・通信グループ
 柳原 友子 京都大学文学部
 科目等履修生
 山口 滋
 山名 康晴 エムケイ株式会社
 横山 真也 サトレストラン
 システムズ株式会社
 渡邊 陽子

＊修士課程

岩間 伸一
 高山 圭介 財団法人社会経済
 生産性本部
 室野 拓 京都市役所

＊大学院博士後期課程

有留 順子
 村田 陽平 日本学術振興会特別研究員

〈院生の研究状況の報告〉

今年度までの院生の研究状況をお知らせします。以下は、閲読を経た論文のリストです。

研究員 村田陽平

・中年シングル男性を疎外する場所，人

文地理 52-6, 1-19 頁(2000)

・日本の公共空間における「男性」という性別の意味，地理学評論 75-13, 813-830 頁(2002)

・男性・異性愛をめぐる空間のポリティクスー 1999 年の「西村発言」問題を事例に一，人文地理 54-6, 557-575 頁(2003)

・岐阜県営住宅「ハイタウン北方・南ブロック」にみる空間とジェンダー，地理学評論, 77A, 463-482 頁(2004)

・Gender equality and progress of gender studies in Japanese geography: a critical overview, Progress in Human Geography, forthcoming.

D 3 レイリン・L・エサウ

・International migration from Tonga, South Pacific: A behavioral approach, Geographical Review of Japan, 77(5) [English Edition 1], 2004, pp.130-145.

・Transnational experiences of Tongan migrants in New Zealand, Asian and Pacific Migration Journal, forthcoming

D 3 沖 慶子

・牧口常三郎著『人生地理学』の同時代評，地理科学 58-2, 65-91 頁(2003)

D 3 中辻 享

・森林管理面よりみた入会林野整備事業の意義ー京都府宇治田原町・和束町を事例として一，人文地理 54-1, 24-39 頁

(2002)

・ラオス焼畑山村における換金作物栽培受容後の土地利用　ールアンパバーン県シェンヌン郡 10 番村を事例として一，人文地理，56-5，1-21 頁 (2004)

・ラオス北部焼畑山村にみられる生計活動の世帯差一幹線道路沿いの一行政村を事例として，地理学評論 (印刷中)

D 3 福本 拓

・大阪府における在日外国人「ニューカマー」の生活空間，地理科学 57-4，255-276 頁 (2002)

・1920 年代から 1950 年代初頭の大阪市における在日朝鮮人集住地の変遷，人文地理，56-2，42-57 頁 (2004)

D 2 埴淵 知哉

・企業の空間組織からみた日本の都市システム，人文地理 54-4，389-404 頁 (2002)

・国際的非政府組織における空間組織の編成，地理学評論，78-2，87-112 頁 (2005)

M 2 柴田 陽一

・小牧実繁の著作目録と著述活動の傾向，歴史地理学，47-2，42-63 頁 (2005)

<学位の取得>

平成 16 年度に学位を取得された方のお名前と論文題目は以下のとおりです。

* 課程博士

村田 陽平：「ジェンダー地理学の再構築

一空間と男性研究の可能性一」

<2004年度講義題目>

* 講義 (系共通科目) *

教授 金田章裕 地理学

* 特殊講義 *

教授 石川義孝 人口減少時代の人口地理学の諸問題

教授 田中和子 空間分析をめぐる諸問題

助教授 米家泰作 地理的知の近代

人環教授 金坂清則 地理学における

人物研究の諸問題

総人教授 山田 誠 地域形成の諸問題

人環助教授 小方 登 地理情報処理の

理論と応用 / 空から見た

ユーラシアの歴史地理

理学部教授 岡田篤正 地形学

経研教授 藤田昌久 地域経済論

地球環境学助手 水野 啓

GIS の基礎技法

講師 高橋 学 環境史・開発史

・災害史

講師 村松 嘉久 東アジアのマイノリティをめぐる人文地理学

講師 岡本 耕平 行動地理学研究

* 演習 I *

教授 金田章裕 地理学研究法 I

教授 石川義孝 地理学研究法 II

教授 田中和子 地理学研究法 III

助教授 米家泰作 地理学研究法 IV

事務局から

* 演習Ⅱ *

教授	金田章裕	人文地理学の諸問題
教授	石川義孝	〃
教授	田中和子	〃
助教授	米家泰作	〃

* 講読 *

教授	石川義孝	英語地理書講読
教授	田中和子	ドイツ地理書講読
人文研助手	田中祐理子	フランス地理書講読
人文研助手	中西 裕樹	中国地理書講読

* 地理学実習 *

教授	田中和子
助教授	米家泰作
博物館助手	上杉和央

* 大学院演習 *

教授	金田章裕	地域の諸問題
教授	石川義孝	〃
教授	田中和子	〃
助教授	米家泰作	〃

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

< 地理学談話会2004年度会計報告 >

(2004年4月1日～2005年3月31日)

【資金会計】

〈収入〉

年会費	172,830
前年度繰越	154,693
計	¥327,523

〈支出〉

運営への振替	177,610
次年度への繰越	149,913
計	¥327,523

【運営会計】

〈収入〉

資金会計からの振替	177,610
秋季懇親会会費	118,000
春季予餞会会費	146,000
計	¥441,610

〈支出〉

秋季講演会・懇親会経費	148,246
春季論文発表会・予餞会経費	165,610
会報・名簿等印刷費	40,000
通信・文具等費	82,662
弔電等	5,092
計	¥441,610

<訃報>

前回の会報以降、次の方々がお亡くなりになりました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。(確認分、括弧内は卒業年、敬称略)

佐々木 裕 (昭和 36 卒)
野崎 文彦 (昭和 19 卒)
石川 栄吉 (昭和 23 卒)
浮田 典良 (昭和 27 卒)
藤森 勉 (昭和 29 卒)

<お知らせ>

以下の会員の住所が不明です。ご存じの方は、談話会事務局までご一報ください。(数字は卒業年、敬称略)

浅井 得一 昭和 11 年
荒賀 紀子 平成 元年
池内 麟太郎 昭和 48 年
石角 強 昭和 45 年
石原 大嗣 平成 09 年
石村 裕輔 平成 04 年
今井 平八 昭和 19 年
岩部 敏夫 平成 03 年
遠藤 正雄 昭和 53 年
大山 晃司 平成 07 年
岡本 靖一 昭和 42 年
岡本 美津子 昭和 62 年
興津 俊之 平成 03 年
小口 稔 平成 03 年
楓 雅之(泰昌) 昭和 20 年

勝村(赤座)眞知子

川合 大地
貴志 謙介
木地 節郎
北口 卓美
児玉 高太朗
清水 究吾
新谷 泰久
田島 渡
塚本 誠
都子
中山 耕至
那須 久代
南部 一寿
西尾 正隆
西沢 仁晴
西山 隆彦
林 克子
林 宏
原 潤
平井 博之
平井 素子
福田 新一
松本 弘史
三木 寛史
御手洗 央治
山口 一郎
山下 良
山田(児玉)憲子
山中 一高
吉野 修司
六嶋 美也子

昭和 48 年
平成 10 年
昭和 56 年
昭和 24 年
平成 02 年
平成 02 年
平成 10 年
平成 02 年
昭和 23 年
平成 02 年
昭和 15 年
平成 05 年
昭和 63 年
平成 11 年
昭和 45 年
昭和 49 年
平成 07 年
平成 元年
昭和 16 年
平成 09 年
平成 10 年
平成 08 年
昭和 46 年
昭和 58 年
昭和 61 年
平成 05 年
昭和 55 年
平成 元年
昭和 45 年
平成 03 年
平成 07 年
平成 05 年

＜オープンキャンパス：2004年度の 報告と2005年度のお知らせ＞

2004年8月に恒例となりました京都大学のオープンキャンパスが開催されました。文学部の見学・説明会もこの一環として、17日に行われました。文学部の全体説明のあと、各系に分かれて専修ごとの説明を行ったうえで、見学者を募りました。研究室訪問では、古地図を見て説明を聞いたり、GISのデモンストレーションを見学したりしていただきました。教員、院生や学部学生たちへの質問コーナーでは、高校生たちから活発な声が聞かれました。

これに先だって、8月4日、地理学教室では、独自のオープンキャンパスを開催しました。高等学校の教員の方々や他大学に在学中で地理学の大学院を志望されている学生の方が参加されました。地理学実習室や博物館地図作業室を見学したり、卒業研究や進路の様子について説明を行いました。

2005年度の京都大学主催の全学オープンキャンパスについては、

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

をご覧ください。文学部の見学・説明会は、8月11日（木）の予定です。

地理学教室のオープンキャンパスも、全学のオープンキャンパスの日程に合わ

せて8月11日（木）に開催予定です。学部だけでなく大学院の受験志望者や、中学高校の教員の方々、また、一般の市民の方にも来て頂けるような企画を検討しております。教室主宰のオープンキャンパスについての詳細な日程や参加申込の案内は、地理学教室のホームページ、<http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/geo/>に、近日中に掲載しますので、そちらをご覧ください。

＜2005年度地理学談話会講演会・ 懇親会のお知らせ＞

本年は下記のように実施する予定です。

記

日 時：11月5日（土）

午後2時—5時

場 所：文学部新館1階

第2講義室

講演予定者：

野澤 秀樹（九州大学名誉教授）

藤井 正（鳥取大学教育地域科学部
教授）

レイリン・L・エサウ

（京都大学大学院博士課程・院生）

懇親会：同日午後6時より

（文学部新館 第1講義室）

☆本年度の談話会費（1000 円）を未納の方は、同封の振込用紙にてお払いただきますよう、よろしくお願ひ致します。

【編集後記】

第 16 号会報編集は、担当となるはずの D 1 への進学者が本年度はいなかったため、昨年度と同じメンバーでの編集となりました。

今年は、新 3 回生に加え、来年地理を専攻するであろうと思われる新 2 回生も多数研究室に出入りしています。学部生と院生の交流が盛んであることは地理学教室の良き伝統ではないでしょうか。

御寄稿・御講演いただきました皆様、
ありがとうございました。

（埴淵・真木・三上）

京都大学文学部地理学談話会 会報 第16号

発行日 2005年5月15日

発行者 地理学談話会

〒606-8501

京都市左京区吉田本町

京都大学文学部 地理学教室内

TEL: 075-753-2793 (直通)

発行所 京都大学文学部地理学教室

URL <http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/geo/>